



第17回 日本腰痛学会

The Annual Meeting of the Japanese Society of Lumbar Spine Disorders

プログラム・抄録集

2009年11月21～22日

東京コンファレンスセンター・品川

会長 四宮 謙一

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 整形外科学分野 教授)

第 17 回 日本腰痛学会の開催にあたって

「From In-house Design to Standardization -Reliable Evidence を求めて-」

会長 四宮 謙一

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科整形外科学分野)

この度、第 17 回日本腰痛学会を主催いたします東京医科歯科大学整形外科の四宮謙一です。会長として一言ご挨拶をさせていただきます。

腰痛は一生のうち 60～80%の人が経験する日常ありふれた症候です。腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症など疾患概念が明らかなものを除いて、あまりに病態が様々なために症候名では呼ぶが疾患名を付けるには至っていないのが現実です。明らかな疾患概念がなく、確固たるエビデンスもない領域においては、治療者はそれぞれ信じる治療法を行い、経験による根拠によってその有効性を主張しているのが 2009 年の現状ではないでしょうか。そこで第 17 回日本腰痛学会のテーマをタイトルのごとくさせていただきました。整形外科医を含む腰痛を治療するあらゆる職種が集まり、経験だけではなく、経験に基づいたエビデンスにより問題点解明のための討論をすることが重要であると考えます。即ち、それぞれの立場からエビデンスを裏付けとした病態と治療法を討論し、できれば現在のほぼ症候名である腰痛症から一部でも疾患概念が明らかとなり、その治療法の合意ができる機会となってもらいたいと考えます。

主題は①急性腰痛の病態に合致した保存療法と運動療法、②慢性腰痛の病態に合致した保存療法と運動療法、③腰部脊柱管狭窄の手術療法；最小侵襲の長所と短所、Instrumentation が必要な症例、④腰痛のメカニズムと評価法、とし、特に保存的治療法について、さまざまな職種からエビデンスに基づいた主張をお聞きしたいと願っています。主題ならびに一般口演への多数の応募を期待いたしますが、新たな展開を示した演題には優秀奨励賞を出す予定にしています。

今回は例年とは異なり、会期を 2009 年 11 月 21 日（土曜）、22 日（日曜）の 2 日開催いたしました。その理由は 1 つにはこのような領域の広い症候群を 1 日では議論し尽くせないのではないかという単純な考え、2 点目には日本で最も交通の便の良い品川駅に隣接する東京コンファレンスセンター品川を会場としたために日曜開催としても全国に帰宅できること、3 点目には日々診療に当たる多くの医療人にとっては土曜日の午後、日曜日が最も都合のよい開催日と考えたからです。

それぞれの職種がプライドを持ってエビデンスをぶつけ合う学会となるように心から願っております。最後に 2009 年 11 月の品川で皆さんとお会いできることを大変に楽しみにしております。